

キャラクター名  
闇口 時雨

プレイヤー名

シンドローム	エンジェルハイロウ サラマンダー		ワークス	アーティスト	カヴァー	高校生/UGNエージェント
	オプション		年齢	20	性別	男
覚醒	感染	衝動	自傷	初期侵食率	33	%
出自	親の理解	経験	喪失	邂逅	好敵手	

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値	HP	30
肉体	2	0	0			2	行動値	12
感覚	3	0	0			3	(非装備時)	12
精神	2	1	3			6	戦闘移動	17
社会	1	0	0			1	全力移動	34

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵			射撃			RC	9		交渉		
回避			知覚	1		意志	2		調達	2	
運転:			芸術: 歌唱	2		知識:			情報: ウェブ	1	
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
「.....」 ~99%	RC	9r+9		2d+3		装甲有効 同エンゲージ不可
100%~	RC	13r+9		2d+24		装甲有効 同エンゲージ不可

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

所持品	
怨念の呪石	
コネ: 噂好きの友人	
思い出の一品	

合計装甲: 0    合計回避: 0

ロイス				
対象	感情(pos)	感情(neg)	タイ	消費
守護者(ガーディアン)	P	N		
石風 夕立	P	憧憬	N	食傷
白金 明日香	P	純愛	N	脅威
	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P: 6    残り財産P: 3

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果: 非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果: コスト分のHPで復活								
絶対零度	2	-	Always	至近	自身	-	-	
効果: 暴走中【精神】判定D+[Lv+1]								
光芒の疾走	1	1	minor	至近	自身	-	-	
効果: [Lv×2]m 戦闘移動								
光の弓	1	1	Major	視界		RC	-	
効果: A+[Lv+2] 同エンゲージ不可								
C:エンジェルハイロウ	2	2	Major	-	-	Synd	-	
効果: C値-Lv								
プラズマカノン	3	4	Major	視界	単体	RC	100↑	
効果: A+[Lv×5]								
鏡の盾	2	8	Auto	-	効果参照	-	100↑	
効果: 自身にHPダメージを与えた対象に同ダメージ与える 1回/シナリオ								
真昼の星	★							
効果: いつでも星を眺めたい								
探知する光	★							
効果: 反射させるの上手くなった								
氷の理	★							
効果: 凍らせるほうが得意								
凍結保存	★							
効果:								
快適室温	★							
効果: 感情がぶれなければ成功するよ								
熱感知知覚	★							
効果: 明日香、少し体温高いけど大丈夫?								
見放されし地	★							
効果: 1人で作曲活動								

高校2年→高校3年→ネットシンガー (兼UGNお手伝い)  
 17→18→20歳に成長する。  
 11/2 生まれ  
 #426579 髪斗目花色

白金明日香との交流は毎月の恒例行事となっている。一人っ子のため、去年からできた「妹」のようにかわいがっている。  
 (この一年で何曲かプレゼントしてもいいかもしれない。)  
 明日香が感情豊かになってきて、疑心的な「兄」としてほほえましく見守っている。  
 →明日香からの押しがあり、色々見つめなおしてお付き合いし始めた。

美鶴城支部長の元、レネゲイドの訓練やUGNの任務をこなしてきたため、去年よりはオーヴァードとしては成長した。  
 ただし将来について、進学か、音楽活動に専念か、はたまたイリーガルからUGN支部員となるか。悩み多き時雨である。  
 あと旧友がまだ見つからない。つらたん。

怨念の呪石は覚醒した原因の人からもらった。  
 もらったというより「受け取られた」が正しい。  
 持ち歩かないでおこうと思っていても、気が付いたら体内に溶け込んでるコワイ石。  
 「君に大変お似合いの石だと思っんです。さあ、どうぞ？」  
 断ろうと思ったときにはすでにそいつはいなくなっていた。